

第三回 平成二十四年六月十六日



## 医療現場におけるアートの役割

藤本 幹也

ご紹介いただきました大手前短期大学の藤本幹也です。私の研究テーマは、医療、福祉の建築計画、防災・避難計画等の研究をしていますが、今回は、少し視点を変えて、医療や福祉の現場で活用されているホスピタルアートについて説明していきたいと思います。

まず、医療機関というものは、我々の日常生活に身近にあり、体調を崩したときや病気をしたとき必ず利用しますが、一般の方が持っている医療・福祉のイメージがどのようなものか説明していきます。次に、海外における医療の現場と日本の医療の現場の環境や雰囲気の違いについて説明します。特に、海外の医療機関では、患者、あるいは患者をサポートする家族の方に対してどうすればリラックスできる環境を提示できるか、あるいは快適なサポート環境を整備することができるのか深く追求し、いろんな工夫がされているので、それらの事例を紹介していきます。次に、日本国内においても、現在、医療の現場でホスピタルアートを含め、様々な工夫がされています。その取り組みの活動内容や医療の現場にどのような効果

を与えているのかを説明します。次に、学生など若者達と医療関係者が連携することによって、医療の環境を活気のある温かな空間に変えていく取り組みをされている病院があります。これらの内容を具体的に説明していきたいと思います。最後に、今回の講義のメインテーマでもあるホスピタルアートは、医療機関だけでなく、様々な場所で、多くの人を元気づけたり、雰囲気改善してくれる役割を果たしています。その具体事例を紹介し、まとめていくという流れで話を進めたいと思います。

では最初に、なぜ医療・福祉の現場にホスピタルアートが必要なのかというテーマで話をします。まず病院というところは、我々が体調を崩した時や、大きな病気にかかってしまった場合、治療をしてもらう施設ですが、現在の医療機関がどのような環境なのか、病院の雰囲気や、診察までの待ち時間、診察終了後の会計までの利用者の行動を振り返ってみてください。また、利用者の視点ではなく、医療機関で働いている方にも着目してみると、医療機関がどのような場所なのか少しは分かってくるかもしれません。これは私個人の意見や考え方が含まれていますが、まず病院等の現場では、医者や、看護師、あるいは事務局的スタッフ等、多くの方が働いています。特に医療の現場というのは、職種によっては異なりますが、二十四時間体制で患者のサポートをしていくことが要求されています。また、医療の現場においては体力的、精神的にも非常に負担が大きく、場合によっては生死と向き合って治療を行わなければならない、非常に過酷な労働環境であることが推測されます。

次に医療の現場を利用する患者自身について考えてみましょう。家族の誰かが入院してしまった場合、病人をサポートする家族の方、あるいは病人の友人など患者の身近な人が医療の現場に足を運ぶことになります。こういった人達は、病院に入院している時、あるいは、病院を訪れた時、こういった気持ちで利用されているのでしょうか。病院なので当然、治療や、様々な検査、あるいは大きな手術をしなければならぬ患者、治療に多大な時間を要する重度の病氣と闘っている患者など、つらい闘病生活が待ち構えていることが考えられます。

こうして医療という空間を見直していくと、病院という場所は非常に毎日が緊張感のある空間であり、人の生死に立ち会う、そういう厳しい環境であることが理解でき、また、患者にとっては毎日が「つらい」「楽しくない」、「たいくつ」、そういった環境にあるということが推測されます。したがって、全体的に「殺風景」、「怖い」、「寒々しい」、といったイメージを持つてしまう人も多くいるのではないのでしょうか。しかし一方で、病院というのは、我々が困ったときに助けてくれる、非常に大切な場所でもあり、人の病いと死すべてに立ち会う大切な場所でもあります。したがって、これからの病院は、癒す、あるいは温かいといった要素を盛り込むことが大切ではないかと考えられます。

では、そういう癒される空間、あるいは温かな空間に変えていくには、どのような手段があるか考えてみると、何か空間に変化を与えるようなきつかけのようなものを提案していく必要があります。何を入れ

るかは、考え方にもよりますが、ここでは、変化を与える提案として四つ紹介していきます。

一つ目に紹介するのは、「アート」です。病院内の廊下や、受付に絵画が飾られていたり、かかりつけのクリニックとか診療所にいくと、たまに、小さな絵画がかけられているのはよく見かけると思いますが、従来から良く目にするものではなく、もっと病院内の壁全体にアートを描いてみたりとか、大胆に病院内の一角のスペースを使って、有名な画家や写真家の作品を展示するなど、まるで病院の中に美術館があるような空間をつくることで、病院の空間が温かくなるのではないかとという提案です。そして、二つ目が、病院の敷地内に花や緑を植えたり、育てたり、患者が自由に散歩できたり、鑑賞することができる庭園を設置するという方法です。ガーデニングが好きな人や、緑を見るのが好きな人、そういった人もたくさんいると思いますが、病院に自然を取り込む、こうしたことによって変化を与えることが可能ではないでしょうか。三つ目は、ワークショップです。一つ目に紹介した作品を鑑賞して楽しむという考え方もありますが、そうではなく、患者同士で、一緒になって一つの作品をつくっていくようなワークショップをイメージしてみてください。例えば、壁に絵を描くにしても、入院している患者や、さらには、そこで働いている医者や看護師にも一緒に参加してもらい、一つの作品をつくり上げていくとします。すると、このイベントを通して人との繋がりやコミュニケーションが自然と発生し、退屈な毎日がメリハリのある生活へと変化してくるのではないのでしょうか。最後は、コンサートや演奏会といった、楽しいイベントを実行する

方法です。病院生活では退屈のぎに、病室に閉じこもりテレビを見たり、ラジオを聞く手段もあります。が、そうではなく、近隣にある学校の学生に病院で楽器を演奏してもらったり、患者の中には、ジャズが好きな人もいるかもしれませんし、初めて耳にする人にとっては非常に新鮮な出会いとなるかもしれません。そんなコンサートを聞くことによって活気のある場に生まれ変わるのではないのでしょうか。

このように、様々なアメニティを病院の中に取り込むことによって、病院の暗いイメージや、堅苦しい雰囲気但至少でも和らいでいったり、癒される、あるいはリラックスできる温かい空間へと変えてくれる可能性が少しでもあるならば、実際に行動に移す価値はあると思います。そして、病院内の環境も良い方向へ変わる期待がもてるかもしれません。

次に、日本ではまだ実際に取り組まれている事例は少ないのですが、ホスピタルアートの具体例を紹介していきます。まずこれは、ある病院のロビーの受付カウンターを撮影したものです(写真1)。この受付カウンターは、有名なガラス工芸家の作品で、静かに流れる川をイメージしたようなデザインとなっています。また、この受付カウンターがあるホールは非常に大きな待合室にもなっており、外の景色が一望できる大きな窓が設けられ、自然採光がたくさん入るよう計画されています。さらに、この空間では、利用者の



写真 1



写真 2



写真 3

待合空間として使用するだけでなく、コンサート会場として地域に開放するなど、多目的に使われています。こういった使われ方もホスピタルアートの一つとして考えられます。

これは病院の敷地内の庭園の写真です（写真 2・3）。病院の中でこういった庭園を運営・管理するというのは、非常に難しく、なかなかうまくいかないこともありますが、この病院では、患者や地域住民に気持ちよく使ってもらうために、この庭園にすごく力を入れています。実際にこの庭園を使われている方は多く、入院されている患者だけでなく、この病院の近くに住んでいる人や小さな子供連れの家族がよく遊びに来るような庭園になっています。入院している患者もそういった風景を見ることで、すごく元気づけられますし、庭の手入れをしていく姿を見ることが非常に安心感が得られ、また、四季の移り変わりであるとか、花が成長していく姿を見て、勇気づけられるに違いありません。

これはある工作教室で作られた作品です（写真 4）。この作品は、ホスピタルアートを専門にプロデュースしている NPO 法人のスタッフの方が手作りで作成されたものです。子供の遊び道具としてはもちろん



写真 4

ん、手作りならではの独特な優しさや、手作りの楽しさを子供達に感じ取ってもらうために作られました。したがって子供達も手作りの遊具を通して色々なことを感じ取ってくれます。また、簡単な作業でしたら子供達も一緒にもの作りに参加してもらいますが、これは自分が病気であることを忘れて作品作りに没頭する等、子供達にとっても良い効果を与えることが考えられます。

最後にコンサートですね。ロビーにピアノを置いたり、演奏をしていただくだけで、また違う空間に生まれ変わります。

次にサインというものについて説明をしていきたいと思います。サインというものは、我々の日常生活において何気ないところに存在し、助けてくれます。サインは、現在の自分の居場所や、いつどの時間の電車に乗れば間に合うか、目的地までどのようなルートを使えばいいのか等、確認するために使います。おそらく皆さんも今日この大学に来られるときに、どういうふうにするれば約束の時間までに行けるか、今日の目的地が初めていくところなら、駅からどのようにしていけばいいかなど、無意識にサインを活用されたと思います。このように安心して目的地までたどれるように誘導してくれるのが、サインです。

また、サインの役割はこれだけではありません。危ない所や、危険を察知させてくれる、あるいはそう

いった場所から人を守ってくれたり、警告をして人の安全を守ってくれるものもあります。他には、ある機構、企業のシンボルとかそういったものを立ち上げて、多くの人に目立つように見せるサインもあります。光の色や、水に光が反射して映し出される色、このような光を空間に取り込むことによって、空間にリズムを与えるような他の種類とは少し役割が異なるサインや、病院を利用する際に、訪れる人に対し、心地よいサービスや情報を提供できるようなサイン、図書館といった公共施設には、初めて利用する人も多く、そのような場合でも、探したい資料や本がどこに收藏されているのか分かりやすく表示してくれるサインもあります。また、初めて訪れる建物の中で今自分がどこにいるのか、あるいはこれから行く目的の部屋までどのようにしていけばいいのかを分かりやすく表示してくれる案内図のようなもの、さまざまな情報から知識を得たり、そうしたことで新たな発見とか、理解を深めていくことに役立つサイン、そしてこれまでのサインとは少し種類が異なりますが、水の音や、花の匂い、そういったもので五感に刺激を与えるようなサインもあります。

このようにサイン一つとりあげても、数多くの種類と役割があり、なくてはならないものであるということが理解できたと思います。我々が日常生活において普段何げなく使っているサインは、他の人に何かを伝えるとか、双方向のコミュニケーションを図るとか、互いに理解し合い共有するという大きな役割がありますが、これは、本日のメインテーマであるホスピタルアートに少し似ているということで例を



挙げさせてもらいました。

次に、サインというものが、どのようにして作られているか説明していきます。例えば初めていく建物内で急におなかが痛くなってトイレに行きたくなったとします。しかし、初めてなので、どこにトイレがあるのか分からない。このような状況になると非常に困りますが、分かりやすいフロア案内図があれば、容易にトイレまでたどり着くことができます。実はこのサインというのは、いろんな情報が盛り込まれており、サイン一つに多くの人の意見やアイディア、考え方が凝縮されています。例えば、サインを設置する位置についても、色々なことを考えなければなりません。このサインを利用する人はどのような人で、床からの程度の高さに設置すれば見やすいのか。つまり、サイン自体がすぐく分かりやすい表示になっていても、見にくい位置に設置されていれば、効果は半減してしまいます。人の目線の高さであるとか、サインに使用される素材、サインに記載されている文字の種類、サインに使われている色彩計画、分かりやすい図など、普段何気なく見ている我々はそういったことを意識せずに使っていますが、サインというものは、非常に細かいところまで配慮され、その建物の利用者の特徴を把握し、どのようにすれば分かりやすいサインになるのか、利用する方を思いやり、利用する側の立場に立った分かりやすいデザインにするために、繰り返し返される地道な作業が積み重なって作られています。そのような点は、ホスピタルアールにも共通する点は多くあると思います。

次に、海外の医療の現場の工夫について事例を使って説明をしていきます。これはホスピスの事例になりますが、ホスピスというのは、終末医療を行う医療機関になります。特徴は、患者がやりたいことを、自分の好きな時間にできる環境を患者に提供しているところです。また、患者をサポートする家族が患者のためにあげたいことを可能な限り実現できるように工夫がされているところにあります。まず、病室は基本的に個室になっています。また、個室には、専用の庭が設けられており、患者も個室から庭を眺めることができ、外に出て本を読んだり、ベッドごと外に出られるようになっていて、暖かい時期は外で家族と過ごしたりすることもできます。もう一つは家族室です。この部屋は個室のすぐ近くに設置しており、家族が休憩できるソファやベッドはもちろん、ダイニングキッチンが設置されています。入院されている患者が食べたい料理をつくってあげたり、家族を取り囲んで一緒に食事ができるようにしてあります。また、付属の図書室もあり、患者の病気について調べることができます。あとは、一人になって考え事したり、リラックスできる瞑想室というのがあります。病院の敷地内には患者が気持ちよく散歩できるように、緑がたくさん植えられている大きな庭園もあります。さらに、患者が多く集まるロビーには、大きな窓が設けられ、そこに水を流したり、人工の滝をつくり、水の流れる音や、水が岩にぶつかる音、そういったものを五感全体で感じ取れるような工夫がされています。こういった病院は、患者自らがやりたいことを選択できる時間や、行動がたくさんあり、患者自身が自由に選択できるところに大きな

特徴があります。

次に、小児科の医療施設を紹介します。利用するのはもちろん、子供が圧倒的に多いわけですが、子供が入院すると家族全体が非常に落ち込んでしまう傾向があります。また、これまでの病院というのは、院内のルールが厳しく、親が直接子供の看病ができなかったりするケースも多くあったようですが、親や家族が子供の看病、サポートをすることによって、入院期間が非常に短くなるという調査結果もあり、最近では、考え方が少しずつ変わってきているようです。

では、実際に小児科病院内で取り組まれている内容を紹介していきます。ここでは、樹齢何百年という非常に大きな楓の木を加工し、子供が座れる椅子や、木をよじ登ることができるようになっています。子供が望んでいるもの―自分の手で直接触れたり、自分の意思で好きなように探検できるような空間―に関心をもってくれます。また、子供達は我々が予想するよりもはるかに発想力が豊かで、非常にびっくりさせられます。そういった発想を膨らませるような空間、こういったものが子供達に非常に良い刺激を与えるということ、紹介しました。次に子供のためのリハビリ空間です。こちらは身体機能を回復させるような空間で、置かれている家具やリハビリ機器にも直線や曲線等色々な形を組み合わせたデザインを使うことによって、子供達に刺激を与える工夫がとられています。

次に取り上げる例は、小さな診療所です。特に規模が小さい場合、患者のプライバシーが侵害されやす

く、患者をとりまく環境があまり考慮されていないケースが多くみられます。これは、日本でも同じようなことが言えると思いますが、知らない人の前で服を脱がなければならないとか、スタッフの複雑な指示にも従わなければいけません。しかし、検査室にカーテンをつけ、プライバシーを確保するとか、子供達に興味を持つような、ゲームや遊び道具を置いたり、水槽を置くなど、ちよつとした工夫をするだけで子供達のたいくつをしのいだり、大きく改善される可能性があります。

このように、海外の事例を紹介しましたが、患者の目線で、患者の希望することは一体何なんだろうか、どうすれば患者は満足してくれるのだろうか、そういったことを第一に考えて、色々なところで工夫がされているということが、分かっていただけだと思います。

次に、国内の医療現場の事例紹介に移らせていただきます。これは京都府立医科大学病院の小児医療センターの事例です。この小児病棟は廊下の壁にいろいろなアートが設けられているのが特徴です。これは犬とウサギが飛行機で飛び回っている絵ですが、他にもかわいい動物絵が至るところの壁に飾られています（写真5）。

次に、小児医療センターから直接アプローチできる屋上庭園を紹介していきます。特徴は、四季折々の植物がたくさん植えられているのと、周囲に広



写真 5

がる素晴らしい景色を見れることです(写真6)。これは別の視点から見た屋上庭園ですが、緑が植えられるほかに、子供達が遊べる遊具が配置されています(写真7)。

次に、京都府立医科大学病院の周産期診療部の説明をしていきます。ここにはNICU新生児特定集中治療室が設置されており、その他には面談室、授乳室というお母さんがよく使われている非常にデリケートなエリアであり、プライバシーの高い場所になっています。そういった空間には、先ほど小児医療センターで紹介したような、かわいらしい絵がたくさん描かれています。また、お母さんがいろいろな相談をすることができると面談室には、机と椅子だけが置かれているだけではなく、ちよつとしたところに絵が描かれていたり、天井部分にも植物の絵が描かれています(写真8)。そんなに派手な色は、ここでは使用されておらず、落ち着いた色合いになっており、こういった作品が



写真6



写真7



写真8

部屋の片隅にあるだけで、温かい空間へと生まれ変わります。

次は、関西ろうさい病院の紹介です。ワークショップにも参加していただける方は、こちらの見学会を予定しています。この病院の特徴は、敷地内にある、ホスピタルパークと呼ばれる庭園です。入院されている患者以外にも地域住民が気軽に利用できるということも多くの人に親しまれているパークです。

まず、このホスピタルパークは、尼崎市で町並みの景観の維持とか向上、あるいは都市の美の形成に大きく貢献したということで、街角チャージング賞というものを平成十九年二月に受賞しています。緑を管理・運営していく、あるいは花とか植物をきれいに管理していくことは決して簡単ではないのですが、ここでは、専任の園芸療法士が一名在籍しています。この方を中心に約四十名程度の方がボランティアとして活動しており、毎日四、五名の方がこのホスピタルパーク内の花の手入れ、草の手入れをしています。この庭園の具体的な効果としては、身体的な効果であるとか、精神的な効果、地域社会に対する効果などがあり、この庭園が与える効果は非常に大きいと思います。

では、この庭園の詳細な説明をしていきます。庭園の入り口には、「安らぎの門」が設けられており、最初に我々を出迎えてくれるところがこの「四季の庭」というところになります。ここに春、夏、秋、冬、エリアごとにそれぞれの植物、その季節に咲く花が植えられています。ここで四季を感じられるような空間にしたいというコンセプトのもと、つくられております。春エリアにはフジ、夏エリアにはノウゼンカ

ズラ、秋エリアにはムベ、ナツツタ、冬エリアにはツキヌキニンドウ、テイカカズラが植えられています。また、もうひとつの工夫として、車いすの人や背の低い子供でも見やすいように地面より少し高い位置に植物が植えられています。また、夕方周りが少し暗くなっても足元が見えやすいように照明がついているので、目の悪い方でも安心して観賞できる、そういった細かいところまで配慮がされています（写真9）。次に、「花の川エリア」を紹介していきます。ここは簡易なりハビリが行えるようになっていきます。平らな廊下の他に、スロープがついているような緩い勾配がついている坂道があったり、緩やかな階段が設置されており、リハビリ訓練の場所としても使用できます（写真10）。

次に、「こもれびの小道」の紹介をします。こ

こでは、患者同士がおしゃべりをしたり休憩できる空間になっていて、ベンチが等間隔に設置してあります。植物がパーテーションの役目をはたし落ち着いた空間を演出しています（写真11）。これは少し変わった椅子になりますが、目線は合っていないけども、お互いの存在は認識しながらコミュニケーションがとれるということで、患



写真9



写真10

者達はこういったものをよく使っているというお話でした(写真12)。

次に「思い出の庭」というところですが、

こちらは、非常にこぢんまりとした静かな

空間になっています。水の音や、葉や枝が風でゆれる音を静かな場所で感じることのできる庭です。ここにも、椅子が設けられており、散歩途中の休憩場所としても利用されます。

次は、「ささやきの庭」です。こちらはベンチが置いてあり、目の前には大きな庭があり、ゆつくりと眺められるようになっていきます。また、近くには、水が人工的に流れている場所があり、水が流れるところにおもしろい金具が取り付けられており、水の流れる動きを見ているだけでも、結構時間があつという間になたってしまうような場所になっています(写真13)。

次は、「日だまりの庭」です。芝生の周辺には板が敷いてあり、散歩道として整備されています。また、



写真 11



写真 12



写真 13



庭の中に建てられている円柱には、植木鉢を吊るせるよう金具が付いており、きれいな花を吊るして観賞できるようになっていきます。おそらくワークショップに行く七月にはいろんな植物が咲いていると思うので、参加される方は楽しみにしておいてください。

最後に、「光の庭」と「桜の丘」の説明をします。まず、「光の庭」には、周囲に歩行訓練用の散歩道が整備されています。一周が約百メートルに設定されていますが、道の途中に今どれくらい歩いたか分かるよう距離が三十メートルごとに記載されています。次に、「桜の丘」には、桜の木がたくさん植えられています。少し小高い丘になっていますが、車いすでも上り下りができるように、緩やかなスロープが整備されています。

次に紹介するのは、京都にあります音羽病院になります。この病院にも小児科病棟があり、いろんなホスピタルアートを飾ったり、子供達と一緒に作品制作に取り組まれています。

こちらの写真は病院の正面玄関になりますが、入口の隣に、子供達が遊べるような遊具が置かれています(写真14)。この場所は、一時撤去も検討されていたようですが、子供達にとっても人気の場所で、今後は遊具を充実させていくことになっているようです。次にこの写真は、病院内の病棟と病棟の間にある路地になります。この場所は、人がやつとすれ違うくらいの空間があり、千羽鶴や健康を祈願した絵馬がかけられています。主に、入院患者の家族の方や、病院の職員の方がここで休憩できる場所として利用され



写真 14



写真 15

ているそうです（写真15）。

また、病院内には京都をイメージした作品がたくさん展示されています。

まず、小児病棟の説明をしていきます。まず小児病棟には、子供広場という、入院している子供達が遊んだり、本を読んだり、作品を作ったりするこ

タルアートがあり、ここには、NPO団体アートプロジェクトのスタッフの方が定期的に訪れ、子供達と一緒に作品を作るイベントを実施したり、作品の修繕、管理をされています。まず、廊下の壁など、子供達が普段良く目にする場所には四季折々の季節を感じてもらいたいというコンセプトで作品が作られています。この写真は、ちょうどクリスマス前に撮影したのですが、サンタクロースの絵とかクリスマスをイメージしたような絵がたくさん飾られています。また、これらの作品は、紙や着色されたフィルムが使用されており、子供達でも簡単に加工して作れる材料を選び、子供達が参加しやすいように工夫されています（写真16）。

こちらは梅雨を表現した作品になります。子供達にとつては外で遊べなくなる嫌な季節ですが、そういった雨の時期でも、考えようによっては楽しく過ごせるといふことをメッセージとして表現してあります。雨のしずくや、傘をさしている動物には愛着が感じられます（写真17）。

次に、病院の地下には様々な検査が受けられる場所があります。待合空間は、検査を受けに来られる人がリラククスできるような間接照明が設けられており、落ちついた演出になっています。また、検査室に向かう途中の廊下には、京都の伝統的な行事をイラストにした絵が描かれています。有名な、「はねず踊り」、「葵祭」、「蹴鞠」の説明が書かれてあるボードが展示されています（写真18）。その他にも、蹴鞠をイメージしたような作品が飾られています。

それでは次に、学生と医療現場の連携事業の事例について説明していききたいと思います。これは、病院内にホスピタルアートを通して患者を勇気づけるといふコンセプトのもとスタートした事業です。プロジェクト（ハッピープロジェクト）は、四つの団体が連携しており、大学、塗料会社、NPO法人アートプロジェクト、病院、ホ

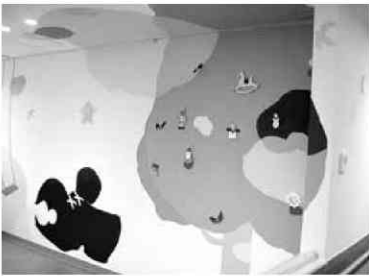


写真 16



写真 17

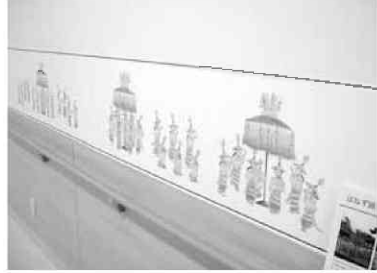


写真 18

スピタルアートを完成させるという同じ目的に向かって力を合わせて成功した事業です。まず、それぞれの役割を説明していきたいと思います。

まずこのプロジェクトには、病院近くにある京都造形芸術大学の学生、および教職員の方が実動部隊となつて作品を完成させるという役割を担っています。具体的な作業は、ホスピタルアートの原案の作成、病院側へのプレゼンテーション、作品を完成させる納期までの工期スケジュールの管理など、まず、学生が普段大学でやっているような課題とは違い、乗り越えないといけない壁は非常に高いのですが、学生にとっては、このような取り組みを通して、社会人としてのルールや厳しさが学べ、成長できる良い機会でもあります。しかし大学だけではこのアートプロジェクトの作品を完成させることはなかなか難しい面もあります。そこで登場するのが、塗料会社と、NPO団体のアートプロジェクトです。特にアートプロジェクトでは、これまで多くの病院で制作活動に取り組みまれてきたという実績と経験があります。今回のプロジェクトでは、主に全体のコーディネーターや作品完成までの作業工程をアドバイスしたり、学生のバックアップをしています。一方、病院側というのは、これまで職場で働いている人や患者から、病院の雰囲気改善してほしいという要求が幾度とされており、なんとか環境改善を実現したいという希望もあり、今回プロジェクトがスター

トすることになったのです。

この写真は今回作品をつくる前の部屋状況です(写真19)。病棟から小児病棟に移動するために、この地下通路は使用されていますが、その雰囲気は非常に殺風景であり、配管がむき出しになっていたり、照明も蛍光灯がついているだけの寂しい空間になっています。これでは、子供や、これから手術に向かう患者にとっても、恐怖感や寂しさしか感じられない、そのような状況でした。実際に作業をすすめていく中で、学生自身にも変化が訪れます。これまでの話の中で、子供達がこういったイベントに参加することによって、与える影響というのは非常に大きいということを説明してきましたが、学生自身も作品を制作する課程の中で、思いやりや、利用者の気持ちを感じ取ることが無意識のうちでできたのかもしれません。このような新たな提案を採用し、子供達が気軽に参加できる作業内容を考え、その作品も展示されることになりました。

こちらがこの壁画の作品の一部です(写真20)。四十メートルという長いキャンパスの中で、テーマとしては平原、森、湿地帯、海に分かれて作品が描かれています。平原には、電車が走っており、草木の中には、動物の親子が昼寝をしている様子など、本当に気持ちが安らぐ絵が描かれています。次に湿地帯には、カエルや鳥たちが一休みできるような、そういった風景を描

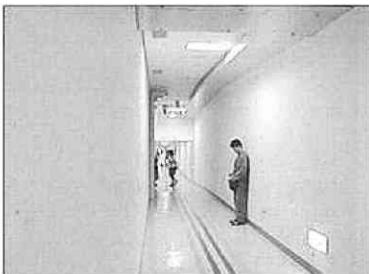


写真 19



写真 20

いています。最後に海には、小魚であるとか、大きな鯨が描かれており、海の中の様子が表現されています。

この作品は、完成までに本当に多くの壁を乗り越えて学生が作ったということもあり、魂がこもっていると云いますか、それが子供達にもすごく良い影響を与えています。それが作品完成後に実施したアンケートにもでてきます。作成前では、外

来の患者一四一人のうち、約五〇%が「不快である」、「何とかしてほしい」と回答されており、病院の職員の方でも七十六名のうち、七十五%の人が「不快である」というふうに戻答されています。しかし、この作品が完成した後、もう一度アンケートを一三〇人の方にとつたところ、「快適」と答えた人が七割以上もあり、一方、病院の職員の方にとつた結果も九割以上が「快適」であると回答されており、このことからこのプロジェクトは大成功したということが分かります。また、こうした取り組みはこの事業で終わるのではなく、今後も病院内の雰囲気づくりの改善に役立ててほしいと病院側も大学に依頼をされ、現在も継続して制作活動に取り組みられています。

では、最後にホスピタルアートのもう一つの役割を紹介していきます。ホスピタルアートというのは、例えば病院や診療所、そういった暗いイメージの建物、空間にホスピタルアートが取り込まれることによつ

て、心地よい空間に生まれ変わる効果があるとこれまで説明してきましたが、ここで紹介するのは、もう一つの可能性として、記憶に残したい場所、あるいは忘れてはいけない場所など、特別な場所にホスピタルアートをを使用することで、その場にいる人達の記憶に残る場所にしたり、大切な場所にするといった事例です。

建物は高校が舞台となります。高校にホスピタルアートが描かれることになった経緯は、この高校に通う生徒が事故で亡くなってしまう事件が起きました。その事故が起きたことによつて先生方もショックを受け、高校に通う多くの学生達にとつても大きなショックを与えることになり、高校全体が暗い雰囲気に含まれることとなります。そこで、当時の校長先生がなんとかして高校の雰囲気を変え、学生に対しても活気のある学生生活を取り戻してもらうために、ホスピタルアートを導入することを決意されました。

また、その事故と同じ時期に、今の若者は、心にあるような問題を抱えている傾向が強く、家庭環境や学生生活全般において、様々な悩みをもつ学生が増えている現状を考慮に入れ、精神的に弱い学生をサポートするプロジェクトも同時進行することになります。

第一段階として、最初は精神的に弱い学生を何とか元気づけていくプロジェクトがスタートします。具体的には、学生をサポートする教室の設置、そして複数の相談員の雇用を考え、教室の雰囲気やレイアウトをどのようにしていくかいろいろな試行錯誤を繰り返し、写真のような相談室が完成します（写真21）。



写真 21

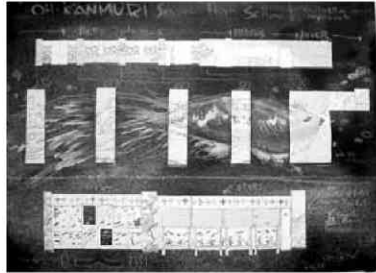


写真 22

から、入り口付近には、手づくりの切り絵が張っており、その他にもいろんなアートが張り付けられ、少しでも部屋に入りやすいように配慮されています。部屋の中からは、中庭が眺められるようになっており、非常に気持ちのいい空間になっています。また、部屋の中に配置されている家具も、ただ単に机と椅子を置くのではなくて、少し丸みを持ったデザインの机を置くなど、細かい配慮がされています。この写真はこれから出てくるホスピタルアートの原図です（写真22）。この原図を描かれた方は今プロの漫画家として活躍されているようですが、原図は相談室内に大事に飾られています。

この写真は、生徒用の玄関から入ってすぐ正面にある廊下を描かれているホスピタルアートです（写真

学生相談室は、一階の中央部分にあり、その他には進路指導室があります。また、この高校の特徴として、玄関を入ってすぐに図書館があります。新たに新設された相談室はもともと図書館の一部でしたが、教職員で話し合いをし、学生にとって訪れやすい場所であるということから、決定されたそうです。この部屋を訪れる学生は、主に心に問題を抱えているような学生が多いこと



23)。この高校に通う生徒は全学年がここで靴を脱いで、この絵の前を通ります。魚の絵は、巨大な大きな魚を表現していますが、魚のうろこの部分は、壁面にガラスブロックがあつたので、これに、カラーフィルムを張り付け、カラフルな魚のうろこを表現しています。また、玄関の柱にも絵が描かれており、海の中の様子や、鳥が木にとまっている絵が壁一面に描かれています。絵に使われている色彩や画風は、インパクトの強い色が使われています。これは学生を勇気づけ、元気づけるという効果を發揮させるためである、と考えられます。この巨大な魚の絵のちょうど裏が図書館になっていますが、玄関から入ってすぐあるので、試験の前などは、利用率が上がるそうです。この巨大なアートは、作成時期がちょうど冬休みの期間中を利用して作成されたそうです。これはその作業風景の写真です（写真24）。廊下にブルーシートを敷いて、大変な作業だったと予想されますが、作品としては本当に立派な作品になっています。また、このような作品の完成後は、絵の管理や維持が特に問題になることが多く、学生のいたずら書きなども心配されますが、実際に絵が完成した後は、一切、らくがき等をする学生はなく、先輩達が魂を込めて作った作品ということで、この作品が伝統的に受け継がれ、ここへ通っている学生がこの絵を大切にしていることが証明できたと考えられます。こういった学生の気持ちも勇気づけたり、明るく



写真 23



写真 24

するという目的で、このホスピタルアートが取り入れられてうまく成功した事例を紹介しました。

最後にこれまでの話をまとめていくと、ホスピタルアートは人の五感すべてに刺激を与えてくれる効果があり、それは、ただ単に、アートの鑑賞にとどまらず、水の音を聞いたり、風の音、葉がこすり合う音、葉が落ちる音、音楽、あとは水に触れる感触とか、土に触れる、ものに触れる、あるいは、草花のにおいを感じ取ること、自分が病気であることや、気が落ち込むなど負の要素を少しでも軽減してくれたり、ひと時の間だけでも忘れさせてくれる効果があります。あと、ホスピタルアートの効果としては、やはり日常生活の質が高まります。何気ない入院生活においてもメリハリがつき、元気づけられる効果があり、それが日常生活に良い影響を与えてくれます。自らの意思であったり、これまで自分が趣味でやってきたことがまた病院でできたりすると、それはそれで非常に楽しいことであり、その人を勇気づけることも可能だと考えます。あるいは人とのつながりです。ずっと病室に閉じこもるより、一歩外に出ることで、入院患者同士の人とのつながりが広がってきたり、そういう体験を通して新たな発見ができる。安らぎのある空間、居場所を作ることができます。ホスピタルアートの良いところは、だれもが手軽に取り組め、作品が上手くできようが、できまいが、

そういうのはあまり重要ではなく、やはり何かに取り組むという姿勢が大切なんだろうという感じがします。あとは、自然の大切さとか、作ることの楽しさを教えてくれます。大切な作品、心のこもった作品というのは多くの人に安らぎを与えてくれ、そして魂のこもった作品は大事にされ、多くの人に愛されます。

ホスピタルアートの今後の課題は、やはりメンテナンスだと思います。実際NPO団体の人が、今も定期的に病院に通われて、メンテナンスをしています。ただ単にその場限りで終わってしまうと、その作品には埃がたまり、大切にもされなくなります。このような状態になるとホスピタルアートとして本来の役割を半減させてしまうことになります。そういった管理体制を整備していくためには、病院におけるホスピタルアートに対する取り組みの姿勢や考え方、人の心を勇気づけるような効果があるということを理解してもらい、積極的に取り組んでいくことが大切だと思います。

今回、初めてホスピタルアートというものに出会い、いろんな視点から医療の現場を見ることができましたし、感動しました。今後の展開としては、ホスピタルアートの可能性を広げ、医療の現場だけでなく、様々な用途で使用され、多くの人にホスピタルアートに触れあう機会を増やして行ってもらいたいと思います。なかなかうまく説明できないところもありましたけども、私がこの半年間、いろんな事例を通して得ました情報を、写真を通して皆さんにお伝えすることができて、本当に嬉しく思っております。これで本日の公開講座を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【参考資料】

- 写真1 「関西労災病院受付ロビー」、兵庫県尼崎市、二〇一二年三月一四日、藤本幹也撮影
- 写真2 「関西労災病院ホスピタルパーク」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真3 「関西労災病院ホスピタルパーク」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真4 「洛和会音羽病院内での取り組み（手作りパズル）」、二〇一一年二月三日、藤本幹也撮影
- 写真5 「京都府立医科大学病院小児医療センターホスピタルアート」京都市、二〇一一年一月二五日、藤本幹也撮影
- 写真6 「京都府立医科大学病院屋上庭園」京都市、二〇一一年一月二五日、藤本幹也撮影
- 写真7 「京都府立医科大学病院屋上庭園」京都市、二〇一一年一月二五日、藤本幹也撮影
- 写真8 「京都府立医科大学病院周産期診療部ホスピタルアート」京都市、二〇一一年一月二五日、藤本幹也撮影
- 写真9 「関西労災病院ホスピタルパーク四季の庭」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真10 「関西労災病院ホスピタルパーク花の川」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真11 「関西労災病院ホスピタルパークこもれびの小径」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真12 「関西労災病院ホスピタルパーク思い出の庭」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真13 「関西労災病院ホスピタルパークささやきの庭」、兵庫県尼崎市、二〇一二年五月一〇日、藤本幹也撮影
- 写真14 「洛和会音羽病院遊具」京都市、二〇一二年六月九日、藤本幹也撮影
- 写真15 「洛和会音羽病院敷地内路地」京都市、二〇一一年二月三日、藤本幹也撮影
- 写真16 「洛和会音羽病院D棟こどもひろば」京都市、二〇一一年二月三日、藤本幹也撮影
- 写真17 「洛和会音羽病院D棟こどもひろば」京都市、二〇一一年二月三日、藤本幹也撮影
- 写真18 「洛和会音羽病院D棟地下検査待合」京都市、二〇一一年二月三日、藤本幹也撮影
- 写真19 「京都府立医科大学病院地下通路」京都市
- 写真20 「京都府立医科大学病院地下通路」
- 写真21 「大阪府立大冠高等学校相談室」高槻市、二〇一二年五月一七日、藤本幹也撮影
- 写真22 「大阪府立大冠高等学校ホスピタルアート」高槻市、二〇一二年五月一七日、藤本幹也撮影
- 写真23 「大阪府立大冠高等学校ホスピタルアート」高槻市、二〇一二年五月一七日、藤本幹也撮影
- 写真24 「大阪府立大冠高等学校ホスピタルアート」高槻市、二〇一二年五月一七日、藤本幹也撮影